

急変したときの備え

在宅医療の不安な要素の1つに、緊急時の対応があげられます。医療者が常時近くにいる病院と違い、在宅医療ではなにかあったときにどうしたらいいかわからず、あわてがちです。急変時にどう対応したらいいか、普段からしっかり備えておきましょう。

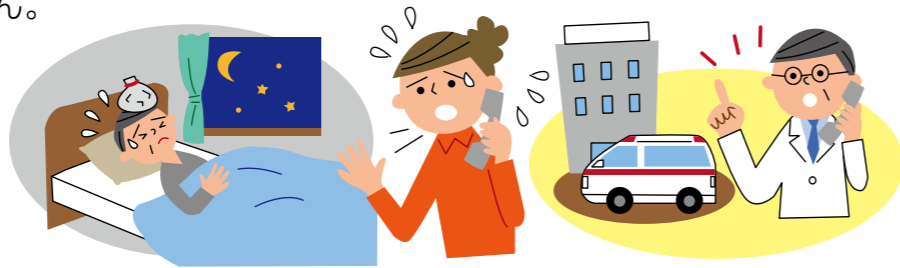
多くの場合、夜間や休日にも緊急対応しています。
普段から緊急時の対応を確認しておきましょう!

在宅で療養生活を続けていると、どうしても在宅患者の容態が急に悪くなったりすることが出てきます。

在宅医療では、夜間や休日にも対応できるような体制になっています。まずは、普段の在宅での状態をよく知っているかかりつけ医や訪問看護ステーションに連絡しましょう。

どうしたらいいかわからず、あわてて救急に連絡したりするケースもよく見られますが、**どのようなときに、どこに連絡したらいいか、症状と対応についてきちんとかかりつけ医や訪問看護師と相談し、緊急時の連絡先を確認しておきましょう。**

発熱時はどうするか、痛みが出たときはどうするか、呼吸や意識に異常が見られたらどうするかなど、病気の種類や状態によって対応はそれぞれです。38℃以上の熱があったとしても、緊急事態であるとはかぎりません。



緊急入院したときなどは
かかりつけ医、訪問看護師、ケアマネジャーに報告を!

夜間や休日などにかかりつけ医や訪問看護師と連絡がとれないまま、緊急入院するというケースもあるでしょう。

そのような場合は、後日でもかまいませんので、**いつ、どのような症状で入院することになったか、かかりつけ医、訪問看護師、ケアマネジャーに報告しましょう。**

入院先の病院からかかりつけ医に連絡がいくように連携がとれているはずですが、きちんと報告することを忘れないようにしましょう。



穏やかな最期への備え

自宅で最期のときを迎えたいという希望を前提として、在宅医療を選択する人も少なくありません。患者本人の意思と家族の理解のもと、在宅医療に関わるスタッフ全員で共通の認識を持って、穏やかな最期に備える必要があります。



患者本人および家族の希望と意思決定を最優先し、
エンドオブライフを含めた在宅医療のサポートもあります

病院のベッドの上ではなく、最期は住み慣れた自宅で過ごしたいという希望から、在宅医療を選択する人もいます。そのため、現在、患者本人および家族のそのような希望を優先し、在宅での看取りまでを前提とした在宅医療も増えてきています。

とくに、がんなどにとまなう強い痛みや精神的な苦痛などを医療処置でやわらげ、自宅で有意義な時間を過ごしたいという意思を尊重する医療や看護、いわゆるエンドオブライフケアにより、在宅での看取りができるようになってきています。



いざというときにどうするか、患者本人、家族、
かかりつけ医で意思統一をしておきましょう

在宅医療を進めていくうえで、最期のときをどう迎えるかについては、あらかじめ患者本人と家族の間で共通の意識を持つておくことが大切です。

末期に急変した場合どうするのか、どこまでの治療を希望するのか、本人、家族ともに納得できるようなプロセスを、かかりつけ医をはじめとした在宅医療のスタッフなどと、普段からきちんと相談しておくようにしましょう。



自宅で最期まで過ごすことができます

自宅で最期を迎えたい、迎えさせてあげたいという希望があれば、最期まで苦痛なく過ごせるように、また介護する方が不安なく看取ることができるように支援します。

家族の笑顔や見慣れた景色に囲まれた“いつもの場所”で過ごすことは大きな安心感をもたらします。病院でなくても医療や介護の専門家による支援を受けながら安らかな死を迎えることができます。